

英語名 : hemorrhagic cystitis

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響をおよぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行ううえでも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

出血性膀胱炎は出血を伴って発症する膀胱の炎症^{ぼうこう えんしょう}で、ウイルス、細菌、薬剤、放射線^{せん}などが原因となります。薬剤性の多くは抗がん薬や免疫抑制薬などでみられますが、抗アレルギー薬、抗生物質や漢方薬などでも起こることがあるので、何らかのお薬を服用していて、次のような症状がみられた場合は放置せずに医師・薬剤師に連絡してください。

**「尿が赤味を帯びる（血液が混ざる）」、「尿の回数が増える」、
「排尿時に痛みがある」、「尿が残っている感じがする」**

などの症状が急に見られたり、持続したりする。

1. 出血性膀胱炎とは？

膀胱は尿をためるための袋状の臓器です。容量は 300 mL 程度で、筋肉とその内面をおおう粘膜からできています。左右の腎臓で作られた尿は尿管というパイプを通り膀胱に蓄えられ一定量に達すると尿意を感じて排尿します。膀胱炎は膀胱の粘膜に何らかの原因による炎症が生じたもので、炎症にともなう刺激により痛みや排尿に関わる症状（膀胱刺激症状）が起きてきます。出血性膀胱炎は出血を伴う膀胱炎で、尿が赤みを帯びる（血尿）という症状がみられます。出血については膀胱粘膜の一部からというより全体からの出血が特徴的とされます。

主な症状としては、尿意が増すことによる尿回数の増加（頻尿）、排尿時の痛み、尿の残っている感じ（ざんによかん残尿感）、血尿がみられます。軽症では肉眼ではわからない程度のけんびきょうてきけつによ顕微鏡的血尿ですが、中等症では肉眼的血尿、重症では血のかたまり塊が見られるようになります。発熱は膀胱の炎症のみではあまり見られません。

原因は小児ではアデノウイルスによるものが多いとされますが、健康女性がかかりやすい細菌性のものでみられることがあります。

また、放射線治療のばんきこういしゅう晩期後遺症で問題となることがありますが、この場合は以前の放射線治療歴から判断されます。

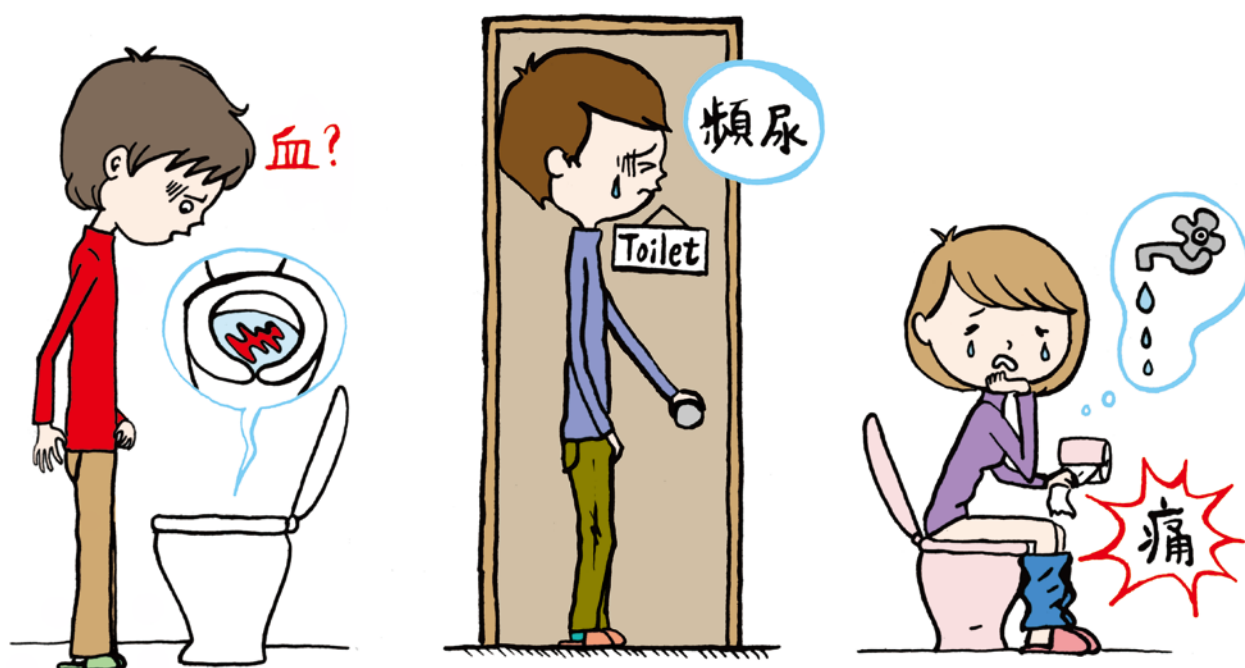
出血性膀胱炎は医薬品によっても起きることがあります。多くの薬品が原因としてあげられており、抗がん薬（シクロホスファミド、イホスファミド）、免疫抑制薬、抗アレルギー薬が以前から知られていますが、抗生物質、漢方薬（しょうさい ことう小柴胡湯など）などでも報告があります。ただ、最近ではシクロホスファミド、イホスファミドについては投与方法が工夫され、メスナというお薬を併用することにより起きることは少なくなりました。

2. 早期発見と早期対応のポイント

「尿が赤みを帯びる（血尿）」、「尿の回数が増える」、「排尿時に痛みがある」、「尿が残っている感じがする」などの症状が出現した場合で、医薬品を服用している場合には、放置せずに医師、薬剤師に連絡してください。

受診する際は、服用した医薬品の種類、量、服用開始からの期間、症状や血尿の程度などを医師に知らせてください。

なお、出血性膀胱炎をよく起こす可能性のある医薬品、すなわち抗がん薬、免疫抑制薬などの治療を受ける方で、あらかじめ担当医から使用医薬品の種類、特徴、効果、副作用（出血性膀胱炎を含めた）、検査の予定などについての説明がある場合は、その指示に従ってください。



※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの「添付文書情報」から検索することができます。

(<http://www.info.pmda.go.jp/>)

また、薬の副作用により被害を受けた方への救済制度については、独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページの「健康被害救済制度」に掲載されています。

(<http://www.pmda.go.jp/>)